

助動詞

第十一章 助動詞

主として動詞を助けて種々の事情を表す辭を助動詞と云ひます。例へば「賊に盜まる。」「記して忘れず。」「學校へ行きます。」「日が出た。」の「る」「ず」「ます」「た」の如きはそれでありまして、いづれも活用いたします。

活用いたします辭には右の動詞を助けるものの外に、筆參議たり。の「た」の如く體言に付き、我は日本國民なり。「彼は優等だ。」疾風は龍の吹かするなり。「虹は水滴に日影が映るのだ。」ですの「なり」「だ」「です」の如く體言又は體言に準じたものに付き、又「動かざること山の如し。」「湖水が鏡のやうだ。」やうです「落花雪の亂るゝが如し。」の如く體言又は體言に準じたものに助詞の「又は」「が」を介して附いて、之に敘述の力を與へるものがあります。斯る類も形式上から助動詞に屬させます。

此の外に又こんなものもある。「彼は優等である。」「雪が降つてゐる。」の「である」「てゐる」の如きものもある。斯るものは二つ以上の單語が集つて助動詞と同じ作用を致します。それで又助動詞に準じて、此所て御説明申上

所動助動詞
能動
所動

能動を所動に
變ずる法

四段、下五段、良変、不良変、
其の他一般、
るる形

ける積であります。
助動詞を分けて、所動、能役令動、敬讓、指定、否定、時推量、希望、比況の九種に致しま
す。

第一節 所動助動詞

動作者が自らする動作を能動と云ひ、或物事が動作者に仕掛けられる動
作を所動と云ひます。例へば馬、馬子を蹴る。「母が太郎を譽める。」の蹴る
「譽める」と云ふ動作は、馬又は母が自分でする動作で、すから能動でありまし
て、馬子、馬に蹴らる。「太郎が母に譽められる。」の蹴らる「譽められる」は、馬子
又は太郎が蹴る又は譽めると云ふ動作をする馬又は母に仕掛けられる動
作だから所動であるのであります。

能動を所動に變じまするには、文語では四段・奈變・良變の否定形に「る」、其の
他の動詞の否定形に「らる」を附け、口語では四段の否定形に「れる」、其の他の動
詞の否定形に「られる」を附けるのであります。文語の「る」「らる」、口語の「れる」「ら
れる」を所動の助動詞と云ひます。

se-ra-re-mu > sa-re-mu 口語

se-ran > san 文語

文語

168 終

四	段	取	ら
奈	變	死	な
良	變	居	ら
上	一	段	着
上	二	段	起
下	一	段	蹴
下	二	段	捨
加	變	來	こ
佐	變	爲	き

らる

口語

四	段	取	ら
居	死	な	れる
上	一	段	着
上	二	段	起
下	一	段	捨
加	變	來	こ
佐	變	し	せ

られる

佐變所動の慣
例ニ六五更ニ
一六八頁ニ

佐變の動詞に「られる」が連なる時には活用形の「せ」と「られる」の「ら」とが約つて「さ」となることが多くございます。例へば「せられる」が「される」となり、介抱せられるが「介抱される」となる類であります。これは全國の大部分殆んどさうであります。が、關西地方には間々原形に云ふ所があります。尙文語では從來「せらる」を「さる」と約めて云ふのを破格として來たのであります。が、既

言説 中用各ノ例
 人知れぬ我が通路の関守は
 人知れぬ我が通路の関守は

良行動詞の慣例

所動助動詞の活用
 一六五 矣り

に其の用例が中古にもありますし、近古の末からは漸々と多くなつて來ま
 して、今日では殆んど常格になつて居ますから、文法上許容すべき事項には
 其の慣用あるものを許容することになつて居ます。

古くは良行に活用する動詞に「又はらる」の連なる時、活用形の「ら又はれ」
 が脱落することがありました。例へば「知られぬ忘れらるゝなどと云ふべ
 きのを人知れぬ我が通路の關守は」「忘らるゝ身をば思はず」の如く云ふ
 のはそれであります。之は「ら」と「れ」と又は「れ」と「ら」と約つたのか、又は
 良行音の二つ重なるのを忌んで其の一を省いたのかであります。口語
 で「叱られるを叱れるなどと誤用することのありますのも是であります。
 所動助動詞の活用は文語では下二段、口語では下一段に活用致します。
 左表の通であります。

文語		
られ	れ	否定形
られ	れ	連用形
らる	る	終止形
らるる	るる	連體形
らるれ	るれ	假然形
られ	れ	命令形

口語	
れ	れ
れ	れる
れる	れる
れる	れれ
れれ	れ

ヤ行下二段所動助動詞

文語の所動助動詞の「る」「らる」は古くは「ゆ」「らゆ」に轉じてヤ行下二段に活用しました。萬葉集に「人にいとほえ。」「昔しのばゆ。」などとありますのは、其の例であります。今日の普通文に用ゐる「いはゆる」「あらゆる」と云ふ語は其の名残であるのであります。

口語の所動の助動詞の終止形連體形の「れる」「られる」「及び假定形の「れれ」「られ」を九州の大部分には「る」「らる」「るれ」「らるれ」と云ひます。

所動の補語
一六五

所動の動詞は其の主語に對する敘述を全うせんが爲に、必ず補語を要します。之を所動の補語と云ひます。所動の補語は能動の動作者即ち主語が位置を變じたものであります。

文語

親死ぬ
子親に死なる。

口語

親が死ぬ。
子が親に死なれる。

力

勢動可能

勢動を作る法

人馬に乗る。

馬人に乗らる。

人犬を打つ。

犬人に打たる。

母娘に袷を着す。

娘母に袷を着せらる。

人が馬に乗る。

馬が人に乗られる。

人が犬を打つ。

犬が人に打たれる。

母が娘に袷を着せる。

娘母に袷を着せられる。

動作者がするに堪へる動作を勢動と云ひます。例へば

此の刀にても切らる。こゝよりも見らる。

むづかしいけれども讀まれる。ゆきも丈も短くなつたが、まだ着られる。

の「切らる」「見らる」「讀まれる」「着られる」の如きは是であります。

勢動を作る方法は總べて所動を作るのと同様で、動詞の否定形に「らる」「れる」「られる」を附けるのであります。「る」「らる」「れる」「られる」を勢動の助動詞と云ひます。

立
日ノ
膝
ヲ
脱
ス

四段の動詞に口語の勢動の助動詞が連なるときには、活用形と「れる」「れ」とが約つて、五十音圖の第四段の音になつて、下一段に活用致します。例へば

上ノ音ノ母音及下ノ音ノ子音トカ脱落ス

か行―書か[○]れる―書ける

が行―漕が[○]れる―漕げる

さ行―押さ[○]れる―押せる

た行―打た[○]れる―打てる

な行―死な[○]れる―死ねる

は行―逢は[○]れる―逢へる

は行 飛ば[○]れる―飛べる

ま行―讀ま[○]れる―讀める

ら行―釣ら[○]れる―釣れる

Kan-ron-ken
gan-ron-ken

國定讀本には「目は見ゆれども、字の讀めざる人をあきめくらと云ふ。」などと文語にも此の形が用ゐてあります。此の形は文語にも使用されるまでに普通となつて居るのであります。

受 ke-na^{suru} akaru.
負 ke-ra^{suru} makaru.

佐變勢動の慣
例 百六十五

下一段の勢動

勢動助動詞の活用

補語

可能の表彰法

テウ動詞ヲ用ナル
連テウ動詞ヲ用ナル
連テウ動詞ヲ用ナル
連テウ動詞ヲ用ナル

又佐變の動詞に口語の勢動の助動詞の「られる」が附くときには、所動の場合の如く活用形の「せ」が「られる」「ら」と約つて「さ」となります。併し少數の地方に尙原形を用ゐることのありますことは、所動の所で申上げた通りであります。

口語の下一段活用の動詞「受ける」「負ける」に勢動の助動詞の「られる」が附いて「受けられる」「負けられる」と云ふべき所を「受かる」「負かる」と云ふことがあります。「試験が受かつた。」「もつと負からないか。」「斯くなりましたものは四段に活用いたします。」

勢動の助動詞の活用は所動の助動詞と同じであります。但し命令形を缺いて居ます。百六十六「負^テカ^ル能^{ハス}」

勢動の動詞は所動の動詞の如く補語を要することがありませぬ。

勢動の動詞は口語には盛に用ゐられますけれども、文語では近來可能の意のある「得」と云ふ動詞を用ゐて「讀み得」「讀むことを得」などの如く云ふことがだん／＼と多くなつて來ました。又進む能はず「言ふこと能はず」の如く、動詞の連體形又はそれが「ことに連なつたものに能はず」を連ねて、不可能を

4. 「能く」副詞ヲ用ナル
5. 「能く」副詞ヲ用ナル
6. 「能く」副詞ヲ用ナル
7. 「能く」副詞ヲ用ナル
8. 「能く」副詞ヲ用ナル
9. 「能く」副詞ヲ用ナル
10. 「能く」副詞ヲ用ナル
11. 「能く」副詞ヲ用ナル
12. 「能く」副詞ヲ用ナル
13. 「能く」副詞ヲ用ナル
14. 「能く」副詞ヲ用ナル
15. 「能く」副詞ヲ用ナル
16. 「能く」副詞ヲ用ナル
17. 「能く」副詞ヲ用ナル
18. 「能く」副詞ヲ用ナル
19. 「能く」副詞ヲ用ナル
20. 「能く」副詞ヲ用ナル
21. 「能く」副詞ヲ用ナル
22. 「能く」副詞ヲ用ナル
23. 「能く」副詞ヲ用ナル
24. 「能く」副詞ヲ用ナル
25. 「能く」副詞ヲ用ナル
26. 「能く」副詞ヲ用ナル
27. 「能く」副詞ヲ用ナル
28. 「能く」副詞ヲ用ナル
29. 「能く」副詞ヲ用ナル
30. 「能く」副詞ヲ用ナル
31. 「能く」副詞ヲ用ナル
32. 「能く」副詞ヲ用ナル
33. 「能く」副詞ヲ用ナル
34. 「能く」副詞ヲ用ナル
35. 「能く」副詞ヲ用ナル
36. 「能く」副詞ヲ用ナル
37. 「能く」副詞ヲ用ナル
38. 「能く」副詞ヲ用ナル
39. 「能く」副詞ヲ用ナル
40. 「能く」副詞ヲ用ナル
41. 「能く」副詞ヲ用ナル
42. 「能く」副詞ヲ用ナル
43. 「能く」副詞ヲ用ナル
44. 「能く」副詞ヲ用ナル
45. 「能く」副詞ヲ用ナル
46. 「能く」副詞ヲ用ナル
47. 「能く」副詞ヲ用ナル
48. 「能く」副詞ヲ用ナル
49. 「能く」副詞ヲ用ナル
50. 「能く」副詞ヲ用ナル
51. 「能く」副詞ヲ用ナル
52. 「能く」副詞ヲ用ナル
53. 「能く」副詞ヲ用ナル
54. 「能く」副詞ヲ用ナル
55. 「能く」副詞ヲ用ナル
56. 「能く」副詞ヲ用ナル
57. 「能く」副詞ヲ用ナル
58. 「能く」副詞ヲ用ナル
59. 「能く」副詞ヲ用ナル
60. 「能く」副詞ヲ用ナル
61. 「能く」副詞ヲ用ナル
62. 「能く」副詞ヲ用ナル
63. 「能く」副詞ヲ用ナル
64. 「能く」副詞ヲ用ナル
65. 「能く」副詞ヲ用ナル
66. 「能く」副詞ヲ用ナル
67. 「能く」副詞ヲ用ナル
68. 「能く」副詞ヲ用ナル
69. 「能く」副詞ヲ用ナル
70. 「能く」副詞ヲ用ナル
71. 「能く」副詞ヲ用ナル
72. 「能く」副詞ヲ用ナル
73. 「能く」副詞ヲ用ナル
74. 「能く」副詞ヲ用ナル
75. 「能く」副詞ヲ用ナル
76. 「能く」副詞ヲ用ナル
77. 「能く」副詞ヲ用ナル
78. 「能く」副詞ヲ用ナル
79. 「能く」副詞ヲ用ナル
80. 「能く」副詞ヲ用ナル
81. 「能く」副詞ヲ用ナル
82. 「能く」副詞ヲ用ナル
83. 「能く」副詞ヲ用ナル
84. 「能く」副詞ヲ用ナル
85. 「能く」副詞ヲ用ナル
86. 「能く」副詞ヲ用ナル
87. 「能く」副詞ヲ用ナル
88. 「能く」副詞ヲ用ナル
89. 「能く」副詞ヲ用ナル
90. 「能く」副詞ヲ用ナル
91. 「能く」副詞ヲ用ナル
92. 「能く」副詞ヲ用ナル
93. 「能く」副詞ヲ用ナル
94. 「能く」副詞ヲ用ナル
95. 「能く」副詞ヲ用ナル
96. 「能く」副詞ヲ用ナル
97. 「能く」副詞ヲ用ナル
98. 「能く」副詞ヲ用ナル
99. 「能く」副詞ヲ用ナル
100. 「能く」副詞ヲ用ナル

えんのう
うん
うん
うん

表すことがあります。之を「進み能はず」「言ひ能はず」の如く連用形に「能はず」を連ねるのも誤でありますし、「進み能ふ」「言ひ能ふ」の様に連用形に肯定の「能ふ」を附けるのも誤であります。又「力能く」「鼎を上ぐ。」「能く其の任に堪へむ。」「の如く、可能の意を有する「能く」と云ふ副詞を上に置くこともあります。古くは又「え進まず」「え言はず」の如く、同じく可能の意を有する「え」と云ふ副詞を上に置くことがあります。今日地方に依つて「えう進まぬ」「えう言はぬ」と云ふのは此の「え」の音便であります。

*
*
*
*
*
*

自然に起る動作

勢動の動詞は更に轉じて自然に起る動作を表すことがあります。例へば

數千年も經たらんと思はるゝ老木。

「花は櫻木」の諺自ら思ひ出でらる。

お正月が待たれる。

行末が案じられる。

令動

能動を令動に
變ずる法

第二節 令動助動詞

或物事が動作者にさせる動作を令動と云ひます。例へば「教師生徒に文を作らす」。「醫者が病人に藥を飲ませる」の「作らす」「飲ませる」は「教師」「醫者」が動作者たる「生徒」「病人」にさせる動作だから令動であるのであります。

能動を令動に變じるには、文語では四段奈變及び良變の否定形に「す」、其の他の動詞の否定形に「さす」、總べての動詞の否定形に「しむ」を附け、口語では四段の動詞の否定形に「せる」、其の他の動詞の否定形に「させる」を附けるのであります。形容動詞も其の否定形に「しむ」を附けて令動に變じることが出来ます。文語の「す」「さす」「しむ」、口語の「せる」「させる」を令動の助動詞と云ひます。

文語

口語

四段 取ら

奈變 死なす

良變 居ら

上一段 着

四段 死なせる

居ら

着

Sa-jacern > jacern

口語

Sa-jacern > jacern

文語 片寄び抄

例 佐變令動の惜

惜 1. 口語 2. 文語

上二段

上二段―起き

下一段―蹴

下二段―捨て

加 變―來

佐 變―爲

さすしむ

動形
詞容

無から

爽かなら

睦若たら

武者言葉では所動に云ふべき所を令動に云ふことが多うございます。

例へば「撃たれて」射らるゝと云ふべき所を「憑み切つたる景安打たせて。」内

兜を射さすな。」の如く云ふ類であります。

佐變の動詞に口語の令動の助動詞の「させる」が連なる時には活用形の「せ

とさせる」の「さ」が約つて「さ」となることが多うございます。例へば「せさせ

る」を「させる」「介抱せさせる」を「介抱させる」と云ふ類であります。併し關西地

方には間々原形を用ゐる所があります。文語では從來「せさす」を「さす」とす

上二段
起き

.....

.....

下一段―捨て

加 變―來

佐 變―し

させる
片れる

るのを破格として來たのでありますが既に中古から人に點つかるべき振舞はさせじ。」「物言ひ案内させたる。」などの例もある位ですから、文法上許容すべき事項に之を許容して居るのであります。

下二段活用の動詞の「得」「歷」及び上一段の動詞の「着る」「見る」「似る」「射る」「鑄る」等の如く、否定形の一音のものは、之に「しむ」を附けるときに「得せしむ」「歷せしむ」「着せしむ」「見せしむ」「似せしむ」「射さしむ」「鑄さしむ」の如く、間々「せ」又は「さ」を狭むことがあります。何れも誤てあります。併し「得しむ」を「得せしむ」と云ふのは既に中古から其の例がありますし、今日では殆んど通則の如くなつて居るので、すから、文法上許容すべき事項に之が許容してあるのであります。又「着る」「見る」「似る」に「しむ」を附けるときに「せ」を狭んで「着せしむ」「見せしむ」「似せしむ」と云ふのは誤てありますけれども、下二段の動詞に「着す」「見す」「似す」と云ふ動詞があります、之から令動を作つて「着せしむ」「見せしむ」「似せしむ」と云ふのは固より誤りてはありません。併し「着る」「見る」「似る」に「しむ」を附けて令動にしたのと「着す」「見す」「似す」に「しむ」を附けて令動にしたのとの間には用法に區別があるのでして、例へば

乙、甲に洋服を着す―丙、乙をして甲に洋服を着せしむ。

令動の助動詞
の活用

令動の助動詞の活用は文語では下二段、口語では下一段に活用致します。

口語	文語	
させ	しめさせ	否定形
させ	しめさせ	連用形
させる	しむさす	終止形
させる	しむるさする	連體形
させれ	しむれさすれ	假 假 既 然 定 形 形
させ	しめさせ	命令形

口語の令動の助動詞は斯く下一段に活用するのでありますが、間々之に四段を交へる地方があります。即ち連用形に「た」の附くときに「讀まし（た）」起き「さし（た）」などと云ふのであります。又九州の大部では終止形連體形

の「せる」を「する」、既然の「せれ」を「すれ」と云ひます。

令動の動詞は其の主語に對する敘述を全うするために、必ず補語を要します。之を令動の補語と申します。令動の補語は能動の動作者即ち主語が其の位置を變じたものであります。例へば

文 語

犬走る。

子供犬を走らす。(しむ)

兒童學校に入る。

父、兒童を學校に入らす。(しむ)

義經、義仲を攻む。

頼朝、義經に(をして)義仲を攻め

さす。(しむ)

兄、弟に財産を譲る。

父、兄に(をして)弟に財産を譲ら

す。(しむ)

口 語

犬が走る。

子供が犬を走らせる。

子供が學校にはいる。

父が子供を學校にはいらせる。

義經が義仲を攻める。

頼朝が義經に義仲を攻めさせ

る。

兄が弟に財産を譲る。

父が兄に弟に財産を譲らせる。

支那ノ文立書ノ多クナリ其ノ中ニ未

所動と令動との連合

令動の補語に附く助詞は文語では「を」「に」「を」して又は「して」、口語では「にて」あります。が「義經に命じて」「使を遣はして」又は「下女をやつて」の如く動詞を補ふことも亦多いのであります。

所動の助動詞は令動の助動詞の下に連なつて、動作者が或物事にさせられる動作を表すことがあります。口語では此の場合に「せ」「が」「られる」「ら」と約つて「さ」になることが多くございます。

文 語

我友に酒を飲ませらる。

生徒、校長に退校させらる。

下男、主人に掃除せしめらる。

口 語

友達に酒を飲ませられる。

れる。

生徒が校長に退校させられる。

第三節 敬讓助動詞

動詞に崇敬動詞と云ふ動作を敬ふもののあること、及び謙讓動詞と云ふ動作を卑下するもののあることは既に述べた所であります。が、通常の動詞は助動詞を伴つて其の意を表すのであります。又崇敬又は謙讓の動詞で

九、

1. 所動 動作ヲ行テくる故トス
2. 勢動 動作ヨリ来ントスモノ

も助動詞を伴ひますと、一層其の意を深うするのであります。今之を崇^{たか}敬^{うや}謙^{けん}讓^{じやう}鄭^{てい}重^{じゆう}の三種に分けましてお話しようと思ひます。

甲 崇敬助動詞

人人祈福

通常の動詞が崇敬の動作を表すには左の三種の方法があります。

(一) 第一種は文語では四段・奈變・良變の動詞の否定形に「る」、其の他の動詞の否定形に「らる」を附け、口語では四段の動詞の否定形に「れる」、其の動詞の否定形に「れる」を附けるので、何れも所動の助動詞の轉じたのであります。

陛下大學に臨まる。元を嘉永と改めらる。

陛下が大學に臨まれる。元を嘉永と改められる。

此の第一種の崇敬の助動詞が何から轉じたかに就きましては、古來二つの説があります。一つは凡て貴人は何事も自分で手を下してはしないで人にさせられるから、常の動作を所動の動作に云つて尊敬したのだと云ふので今一^一つは貴人尊長の動作を云ふ時に、自らものすると云ふより、何事も能くする勢力があるやうに云へば、自然鄭重に聞えるので、尋常の動作を勢

心動／神流り妙／何々、

今動ノトノ出テ

人々動ヨリ出テ散ル

第二種の崇敬
助動詞

動に云つたのだと云ふのであります。此決然の二つの中で何れが當つて居るか判定は出来ませんが、或は前説が當つては居ないかと思ひます。又或人は所動から轉じたのならば所動の補語が入ると云ひますが、所動が勢動に變じて勢動の補語を要しない如く、尊敬に轉じても尊敬の補語を要しないのだらうと思ふのであります。

第一種の崇敬の助動詞は令動の助動詞の下に連なつて、令動の動作を敬ふに用ゐられることがあります。

文語

皇后の宮、仲正の女に琴を引かせらる。

忠盛に鶴を射させらる。

語

皇后の宮が仲正の女に琴を引
かせられる。

忠盛に鶴を射させられる。

(二) 第二種は四段奈變・良變の動詞の否定形に「す」其の他の動詞の否定形に「さす」總べての動詞の否定形に「しむ」を附けるので、何れも令動の助動詞から轉じたのであります。尊敬の「す」「さす」「しむ」が令動助動詞から轉じたと云ふ理由は、貴人と云ふものは何事も自ら手を下してはしないで、多くは人に命

じてさせる處から、自然に尊ぶ方に移つたのだと云ふのであります。^{（常用）}「す」「さす」「しむ」は古くは其の儘でも用ゐましたが、普通には「給ふ」「おはす」を續けて用ゐるのであります。「しむ」及び「おはす」を續けるものは今日の普通文には用ゐませぬ。

天顔殊に麗しく笑ませたまふ。などかくははからせおはします。

大いに民心を得させたまふ。

おほやけにも行幸せしめたまふ。

第一種の崇敬の助動詞は第二種の崇敬の助動詞の下に連なつて、一層深い敬意を表すことがあります。

天保十一年三月皇太子に立たせらる。侍従を差遣させらる。

第二種の崇敬の助動詞は所動の助動詞の下に連なつて所動の動作を尊敬するに用ゐることがあります。

皇子傳御に抱かれさせたまふ。上皇一本の書御所に籠められさせたまふ。

第二種の崇敬の助動詞は、令動の助動詞の「す」の下に連なつて、令動の動作

を尊敬するに用ゐることがあります。

上東門院人々に歌詠ませさせたまふ。

第二種の崇敬の助動詞の「さす」は敬讓動詞の「きこゆ」の下に用ゐられますときには、轉じて卑下の意を表します。例へば「え思ひたまふるまゝにもえ聞えさせぬを。」女の宿世はかく浮びたるなん哀に侍るなど聞えさす。の如きものであります。

(三) 第三種は文語では動詞の連用形に「たまふ」「おはします」「おはす」「います」「ます」等を附け、口語では動詞の連用形に「お」を冠せたまもの又は或名詞や二字以上の漢字に「お」や「御」を冠せたまものに「なさる」「あそばす」等を附けるものであります。何れも崇敬の動詞から轉じたものでありますけれども、其の原意を失つてしまつて、唯尊敬の意を表すに用ゐられるのであります。文語では「たまふ」の外は、普通文に用ゐられることが、稀であります。口語の「なさる」と「あそばす」とでは「あそばす」の方が、一層敬意が深うございます。

文 語

皇子入鹿の肩を斬り給ふ。

口 語

いつも五時にお起きなさる。

第三種の崇敬
助動詞

動詞

文語の尊敬を
表す他の方法

大臣いとをかしと聞きおはす。

天曆の御門四十になりおはし

ましけるとき……。

されど歸りいましにけり。

推開いて出て來ませ。

文語の「たまふ」は古くは熟語動詞の間に狹んでも用ゐました。例へば今日の普通文ならば「見重ね給ふ」「見習ひ給はぬ」などと云ふべき所を「心々なる人の有様どもを見給ひかさぬるにつけても」「下人の上をも見給ひ習はぬ御心地に。」の如く云ふ類であります。

文語では右の方法の外に或名詞又は二字以上の漢語に「おん」や「御」を冠らせたもの、又は冠らせぬものに、良變の「あり」を續けて動作を尊敬するに用ゐることがあります。

陸海軍の今の制度を定めたまへる由來を御諭しあり。

北方の天を望みて崩御あり。

これに第二種の「す」「第一種の「らる」を續けますと、一層敬意が深くなります。

兄さんのお噂なさる。
蠶をお飼ひ遊ばす。「さうだと
聞いて御安堵遊ばす。

陛下御參拜あらせらる。

慶應二年十二月崩御あらせらる。

口語の尊敬を表す他の方法

口語の尊敬を表す他の方法

口語では前に申す如く動詞の尊敬を表すには、多くは連用形に「お」を冠らせて「なさる」「あそばす」を附けるのでありますが、加變の「來る」「佐變の「する」にはさうは致しませぬ。それは此の動詞には「いらつしやる」「又は「なさる」「あそばす」と云ふ特別の崇敬動詞があるからであります。又「なさる」に限つては連用形に「お」を冠らせなくても附くことがあります。例へば「字を書きなさる」。「人を集めなさる」の如きものであります。これは「お」を冠らせたものより敬意が薄うございます。それに又標準ともすべきものでもありませぬ。

口語では又動詞の連用形に「お」を冠らせたもの、又は或二字以上の漢字に「お」や「御」を冠らせたものに助詞の「に」を附け、更に動詞の「なる」を附けて動作を敬ふに用ゐます。例へば

先生がお話しになる。」「おつかさんが御心配になる。」

又同じ形に動詞の「くださる」を附けると、または動詞の連用形に「お」を冠らせないものに助詞の「て」を附け、更に「くださる」を附けると、人には、人が自分

又は他に對して仕向ける動作を尊敬するに用ゐます。

珍しい物をお見せ下さる。郷友會へ御出席下さる。

本を貸して下さる。

乙 謙讓助動詞

通常の動詞が謙讓の動作を表しますには、文語では動詞の連用形に「たてまつる奉」「まづる」「まゐらす(參)」「まうす(申)」「きこゆ(聞)」等を附け、口語では動詞の連用形に「お」を冠らせたもの、或名詞や二字以上の漢語に「お」や「御」を冠らせたもの、又は冠らせぬものに「いたす(致)」「まうす(申)」「まうしあげる(申上)」「つかまつる(仕)」を附けるのであります。何れも謙讓の動詞の轉じたものでありますけれども、其の原意を失つて、唯謙讓の意を表すに用ゐられるのであります。文語の「きこゆ」は普通文には殆んど用ゐられませぬ。

文 語

鎌足、中大兄皇子に親しみ奉る。

宮に後れまゐらせて後……。

口 語

宅でお待ち受け致します。

お噂致して居ました。澤山頂戴

一尺ばかりの刀を抜きかけて、
守り申しけるとぞ。

大内山を思ひ遣り聞えながら

...

致しました。

参る様でしたら、お誘ひ申します。

お手を取つてお出し申上げまし

た。善い道の方へ御案内申上げ

ました。

有難くお受け仕ります。

承知仕りました。

口語では今申す如く、動詞の謙讓を表すには、連用形に「お」を冠らせて「致す」

申す等を附けるのですが、加變の「來る」佐變の「する」にはさうは致しませぬ。

「参る」致す「仕る」と云ふ特別の謙讓の動詞があるからであります。

謙讓の助動詞の附く動詞は不完全自動詞又は他動詞でありまして、それ

が附いたものは不完全自他動詞の補語又は完全他動詞の客語に對して卑

下する動作を表します。例へば「鎌足中大兄皇子に親しみ奉る」あの師匠が

お嬢さんにお琴をお授け申しました。の「親しみ奉る」お授け申しましたと云

ふのは、補語の「中大兄皇子」お嬢さんに對して卑下する動作を表し、天皇を守

謙讓の動作と
補語客語との
關係

り申しける。」「大神をお出し申上げました。」の「守り申しける」「お出し申上げました」は客語の「天皇」「大神」に對して卑下する動作を表すのであります。

文語の謙讓の助動詞には崇敬の助動詞が連なる事があります。此の場合にも謙讓の助動詞は補語又は客語に對して卑下する意を表し、崇敬の助動詞は主語に對して尊敬する意を表すのであります。例へば「母の女御も春宮に添ひ奉らせ給ふ。」の「添ひ奉る」は補語の「春宮」に對して卑下する動作を表し、「添ひ奉らせ給ふ」は主語の「母の女御」に對して尊敬する動作を表すのであります。尼君よ、光源氏をかゝる序に、「見奉り給へ。」の「見奉る」は客語「光源氏」に對して卑下する動作を表し、「見奉り給へ」は省略された主語に對して尊敬する動作を表すのであります。

丙 鄭重助動詞

我が話し掛ける人に向つて動作を鄭重に言ひ表すには、文語では動詞の連用形に「はべり」「さぶらふ」「さふらふ」を附け、「見る」「思ふ」「聞く」と云ふ動詞の連用形には下二段に活用する「たまふ」をも附け、口語では動詞の連用形に「ます」を

附けるのであります。文語の助動詞は何れも謙讓の動詞から轉じたものでありまして、「さふらふ」を書簡文に用ゐる外は、今文に用ゐられることは少うございます。

文語

もろこしには春の花の錦にし
くものなしと云ひ侍り。

辛い目を見さぶらひつる。

今朝出發つかまつりさふらふ。

人に漏さじと思ひたまふれば

•
•
•
•
○

鄭重の助動詞は今申す如く主語の動作を我が話し掛ける人に向つて鄭重に云ひ表すに用ゐるのですからして、對話又は書牘文に用ゐて、草子地には用ゐることはありません。尤も撰集の詞書などに「侍り」を用ゐたのがあります。これは元來公に奉る性質のものだからだと云ふ事でありませう。

鄭重の助動詞の「たふ」も熟語動詞の間に狭んでも用ゐられます。例へ

地ノ文ニナクハ対話又ハ書ト腹又

ば「見あきたまへながら。」「思ひ煩ひたまへて。」「などと云ふべき所を、案内も残る所なく見たまへおきながら。」「聞えさせざらんもひがくしう思ひたまへ煩ひて。」「などと云ふ類であります。

口語の崇敬又は謙讓の助動詞は普通には「ます」を伴つて崇敬又は謙讓の動作を丁寧に云ふことが多うございます。」「陛下が大學に臨まれます。」「いつも五時にお起きになります。」「宅でお待ち受け致します。」「文語でも謙讓の助動詞に鄭重の助動詞を伴ふことがあります。」「さやうならん有様も見奉り侍りなば。」「深く喜び申し侍り。」「誰にか憂へ申しさふらはむ。」「

口語の鄭重の助動詞の「ます」は「ませ」「まし」「ます」「ますれ」と活用致します。

否定形―鶏はまだ鳴きませぬ。

連用形―夜が明けました。

終止形―これから上野へ参ります。

連體形―あなたの入らつしやいますのはどちらですか。

假定形―本を讀みますれば分りませう。

命令形―さあ、おあがりなさいませ。

否定形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
ませ	まし	ます	ます	ますれ	ませ

否定形の「ませ」には「ない」は附きません。終止形連體形の「ます」は「ますする」と云ふことがあります。又命令形は「まし」とも云ひます。

命令形の「ませ」又は「まし」は「あがる」「めす」を除く他の崇敬動詞及び崇敬の助動詞の「なさる」「あそばす」「くださる」の下ばかりに附きます。

こちらへ入らつしやいませ。(「まし」) 少しばかり下さいませ。(「まし」)
 これでその馬をお求め遊ばしませ。(「まし」) 新聞をお読みなさいませ。(「まし」)
 せ。(「まし」) 郷友會へ御出席下さいませ。(「まし」)

崇敬動詞、又は崇敬の助動詞の「なさる」「あそばす」「くださる」の下に「ませ」又は「まし」の附いたものは命令の最も鄭重な表彰法であります。「入らつしやい」「下さい」の如き崇敬動詞の命令形、又は「お求め遊ばせ」「お読みなさい」「御出席下さい」の如く、動詞の連用形に「お」を冠せられたもの等に崇敬の助動詞の命令形を附けたものが之に次ぎます。又「お求め」「お読み」の如く助動詞を省いても

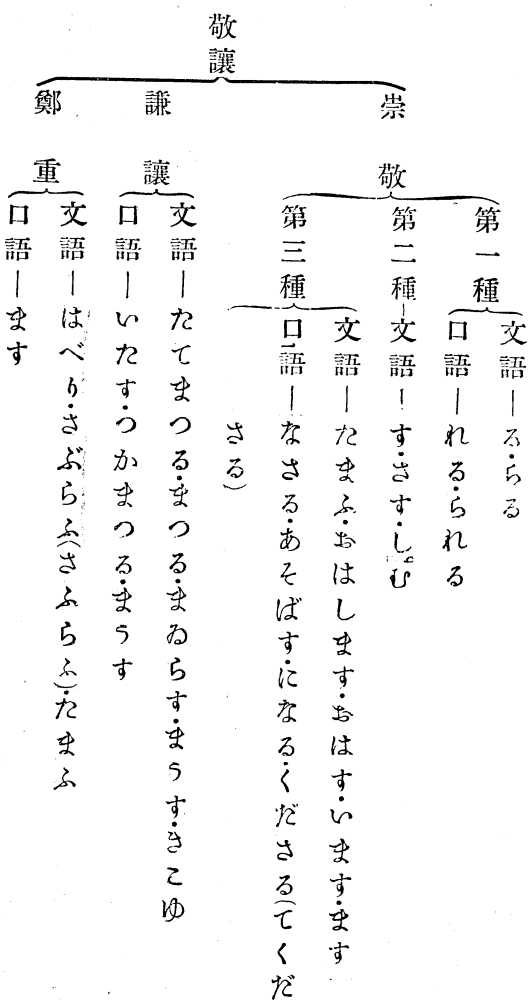
申しますが、敬意はずつと薄うございます。國定讀本には母が子供に用事を云ひ附ける所に「そこにお皿があるから取つておくれ。」「そこに切つてある筈をお鍋の中へ入れておくれ。」「一寸とお待ち。」「手が生臭いから、その柄杓を取つて、水をかけておくれ。」と云ふやうに此の形が使つてあります。又通常の動詞の連用形に何も冠らせずになさるの命令形の「なさい」を附けて「讀みなさい」「起きなさい」「見せなさい」の如く云つても、命令を表します。併し敬意はずつと薄く、又標準とすべき表彰法でもありません。此の形は又「讀みな」「起きな」「見せな」の如く「なさい」の「さい」を省いても云ひます。西國では「讀みさい」「起きさい」「見せさい」のやうに「なさい」の「な」を省いても云ふ所がありますし、「讀みな」「起きない」「見ない」のやうに「なさい」の「さ」を省いても云ふ所もあります。何れも敬意は益々薄く又必ず矯正すべきものであります。「なさい」の「さい」を省いた「な」は「讀みねえ」「起きねえ」「見せねえ」のやうに「ねえ」とも云ひます。これは東國地方の下層の階級に用ゐるので固より齒牙にもかゝらぬ表彰法であります。

「たまふ」は口語には用ゐられない助動詞ですが、唯其の命令形の「たまへ」は

概括

常に用ゐます。「讀みたまへ」「起きたまへ」「見せたまへ」

以上敬讓の助動詞の章で申上げた所を概括致しますと、



第四節 指定助動詞

指定助動詞
(解説するも
の)

或事物に就て解説し、又は斷定するに用ゐる助動詞を指定の助動詞と云ひます。或事物に就いて解説致しまするには、體言又は之に準ずべきものに、文語では「なり」、口語では「だ」「です」を附けるのです。「です」を附ける方は鄭重な表彰法であります。

文 語

正成は忠臣なり。

地球は「東より西に向ひて旋轉する」なり。

鷗と見ゆるは「白帆の行く」なり。

短きやうなれども、實は「長き」なり。

そは「汝の惡しき」なり。

予は「瞥見したるのみ」なり。

前にも申しました如く、用言又は用言を根幹とする連語節は、文語では連體

口 語

正成は忠臣だ。(です)

地球は「東から西へ向つて旋轉するの」だ。(です)

鷗のやうなのは「白帆の行くの」だ。(です)

短いやうだが、ほんとうは「長い」の「だ」。

それは「お前がわるい」の「だ」。

私は「ちらと見たばかり」です。

原田ニ就キテソノ註ヲ示シテ云フ

18. $aa \rightarrow aa$
 $no \rightarrow en \rightarrow iden$

$aa / ya \rightarrow ya$
 $\underline{re}en, \underline{re}en \rightarrow \underline{de}en$

原因の略

關西地方では多く「た」を「ぢや」と云ひます。近畿地方ではそれを「や」と云ひ「です」を「とす」又は「だす」と云ひます。「だ」です」に一定したいと思ひます。

指定の助動詞の「なり」「だ」「です」は原因に就いて、結果を云はずして、結果に就いて原因を解説するときには普通に結果を云ふ語句を省略いたします。例へば「父は君の御爲に忠義の兵を起して賊を平げしめんと汝を歸したまひしなり。」惜しいから捨てないのだ。」の如く原因に就いて結果を解説するのでなく、結果を上において、父の汝を返したまひしは、君の御爲に忠義の兵を起して賊を平げしめんとなり。」捨てないのは惜しいからだ。」と云ふときには、賊を平げしめんと」の下に、汝を返したまひしが省かれ、惜しいからの下に、捨てないが省かれて居るのであります。

口語では體言又は之に準ずべきものに助詞の「て」を附け、更に「ござります」又は「ございます」を附けても物事の解説を致します。これは「です」よりも一層丁寧であります。又助詞の「で」の下にある「あります」を續けても物事の解

い所には其の用例がありませんが、後世には後藤點一齋點などの漢文の訓點から導かれて頗る盛に用ゐられて來ました。後藤點などに之を用ゐましたのは、漢文の「孝悌也者仁也者中也者」の「也」を字なりに「なり」と讀み、之を「有顏回者」嬖人有威倉者の如く、也の字のないものにも推し及ぼしたのであります。が、其の由來は兎も角として、今日の普通文では全く常格のやうになつて居りますので、文法上許容すべき事項に之を許容して居るのであります。

「なり」は物事を解説する用法から轉じて敘述を確めるに用ゐられる事があります。用言の終止形に附きます。例へば「秋の野に人まつ蟲の聲なり。」皆人は花の衣になりぬなり。」の類であります。

次に或物事を斷定致しまするには體言に「たり」を附けます。「小野篁參議たり。」身王侯たれども驕らず。」これは文語に限る助動詞であります。

「たり」は第三種の形容動詞の如く活用致します。但し、としてを中止形に用ゐることはありません。

(斷定するもの)

活用

否定形

連用形

終止形

連體形

已然形

命令形

一九一

文語

未然形―鳥も鳴かずば打たるま

じ。

副詞形―絶えず往來す。酒も飲

まず、茶も飲まず。

終止形―詳しくは知らず。

連體形―夜の明けぬ前に勝負は

決すべし。

既然形―書を讀まねば事理を辨

ぜず。

口語

副詞形―絶えず來る。酒も飲ま

ず、茶も飲まぬ。

終止形―詳しくは知らぬ。

連體形―夜の明けぬ前に勝負は

きまらう。

假定形―鳥も鳴かねば打たれま

い。本を讀まねば物の

道理が分らぬ。

未然形
白二エ
副詞形
終止形
連體形
既然形

文語の未然形の「ず」はいつも「來ずば」「見ずば」の如く助詞の「ば」を續けるのでありますが、それも形容詞の所で話しました様に「來ずあらば」「見ずあらば」の如く云ふべき所を省いて云ふのだと云ふ説があります。併し斯う省いて云ふのが慣例になつた上は、尙未然形と云ふのを立てるのが至當だら

劇曲

す 副 詞 形

すゝた、形、色

「ず」の副詞形の「ず」は、いづこにも行かず。目には見えずしての如く。又は「して」を連ねることがあります。「すで」は約つて「で」となります。「いづこにも行かで。」目にも見えて。今日關西方言に行かいて「見えん」などと申しますのは「行かで」「見えて」の音便であります。

口語の副詞形の「ず」は、物も云はずに行つた。飯も食はずに寝て居る。の如く、「に」を伴ふことが多いです。

「關西地方ではぬを過去に云ふときに「なんだ」と云ひます。「行かなんだ」「見なんだ」。又「行かざつた」「見ざつた」などと云ふ所もあります。ざつたはざり」に「た」の附いたものの音便であります。

✓副詞形の「ず」は古くは連用形にも用ゐて居ります。例へば「醉泣きする」になほしかずけり」母と云ふ花の咲き出來ずけむ」の如きはそれで「けり」「けむ」は連用形に附く助動詞ですから、それが連なつて居る「ず」も連用形なのであり

ます。

√副詞形又は連用形の「ず」は古くは「に」とも用ゐて居ります。例へば「せんすべし」に戀ふれども。「かくのみ君は見れどあかにけむ」。之は中古以後には殆ど全く廢つて了ひました。

√終止形の「ず」は「親知らず」「土附かず」「見ず」「知らず」の如く名詞を作る形にもなり、問はず語「知らず顔」の如く名詞の上に附いて熟語を作る形にもなります。√次に連體形の「ぬ」は動詞の「待つ」が「待たく」「行く」が「行かく」となる如く、體言化して「なぐ」となることがあります。「淺き心を我が思はなくに」。「君の來まさむ道の知らなく」。之は從來「延言」と云はれたものでありますが、實はさうでなくて「ぬ」の意を成すものであります。

次に文語の「ざり」は「ず」が「あり」と熟合したものでありまして、良變のごとく活用致します。尤も終止形は古い所にもまだ用例が見附かりませぬ。今日の普通文に於きましては、未然形終止形の「ず」を除きましては「ず」の諸活用を用ゐることの代に「ざり」の諸活用を用ゐて居ります。

未然形―知らざらば教ふべし。

ma-ta-k
yuka > yukaku
nu > naku
mk-to
「ak」が入る

en-rui
2000

見^みく^くつて / ^{ku}nakutte. > ^{ku}nakutte
見^{mi}く^{ku}つて > ^{mi}nakutte

(ない)

連用形―かくまで人を感ぜしめんとは思ひも寄らざりき。

連體形―流れざる水には蟲湧く。

既然形―一日見ざれば千秋の思あり。

命令形―惡しき友には交はらざれ。

次に口語の「ない」は次のやうに「なく」「ない」「なければ」と活用致します。

副詞形―人が信用しなくなる。

終止形―詳しくは知らない。

連體形―夜の明けない前に勝負は定まらう。

假定形―鳥も鳴かなければ撃たれまい。 本を讀まなければ物の

道理が分らない。

副詞形の「なく」には多く「なる」又は「する」が連なります。副詞形にて「が」附く時には「行かなくつて」「見なくつて」の如く促音を伴ふことが多いです。又「行かないで」「見ないで」の如くにも云ひます。「ない」を過去に申しますときは「行かなかつた」「見かなかつた」の如く「なかつた」と云ひます。「なく」「が」とと熟合したものに「た」の附いたものの音便であります。

活用表

		文		語		口		語	
		未然形	副詞形 連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	副詞形	終止形
ず	ざら	ず	ざり	ず	ぬ	ね		ず	ぬ
				○	ざる	ざれ	ざれ		ぬ
								なく	ない
								ない	ない
								なけれ	なけれ
									ね

口語の形容詞
の否定

口語では形容詞を否定するには、「人口は多くない」「あの山は高くはない」の如く副詞形に「ない」を附け、第二種の形容動詞を否定するには、「此所は静かでない」。「あつちの處置も穩かでない」のごとく中止形に「ない」を附けるのです。「ない」は形容詞ですけれども、斯の如く助動詞の如き作用をすることもあるのであります。

次に文語の「じ」は動作を遲疑して打消すに用ゐます。「遠くは行かじ」。「よも虚言は言はじ」の如きはそれで、動詞の否定形に附きます。活用は致しませぬ。併し形を變へずして連體形の如く用ゐられる事があります。「幾世し

じ

習慣示ス

現在時

時に關係なき
現在時

動作の時間的關係を表すものを時と申します。時には種々の形式があります。これから項を分つて順次にお話し致します。

第六節 時の助動詞

甲 現在時

動作の現に行はれるのを現在時と云ひます。例へば「雨降る。」「風が吹く。」の類であります。

現在時はイ間斷なく繼續する動作を表すとき、(ロ)一定の時間を以て循環する動作を表すとき、即ち日常の習慣を表すとき、ハ、何れの時、何れの世にも通用すべき定論又は格言を表す時等に於て、時に關係なく用ゐられることがあります。例へば

文
語

大日本帝國は萬世一系の天皇

口語

地球は太陽のまわりを廻轉す

ノ一史め現在
ラハス
現在
過去未來を表
す現在時
Emphatic / R.P.
Rhetoric / R.P.

之を統治す。(イ)

予は毎朝六時に起く。(ロ)

物體は空間の一部を占む。(ハ)

病は口より入る。(ハ)

✓現在時は又(イ)過去に起つた動作を眼の前に活躍させようとする時、又は

(ロ)或動作が未來に於て起ることの確實な時に、過去時(後云ふ)又は未來時(後云ふ)

の代に用ゐられることがあります。(イ)の場合は之を歴史的現在と云ひま

す。

文語

惡源太の乗りたまへる馬……
：馬手の方へ蹶込んで、小膝を
折りてどうと伏す。鎌田兵衛
延ばさじと十三束取つて番ひ、
よつ引いてひようと射る。重
盛の射向の袖にはたと中りて

る。(イ)

毎日敷島を二袋づつのむ。(ロ)

空氣の密度は高さに反比例す

る。藝は身を助ける。(ハ)

口語

(イ) 船の底へ穴を明けたと見えて、
水がはいつて來たから、侍は騒
ぐ。女は泣き出す。船頭は鎮める、
仲々の騒ぎ。こちらは町奴の
連中が手を叩いて喜びました。

飛び返る。頓て三の矢射たり
 ければ、押附にちようと當りて
 籠かつき碎けて刎ね返れり。(イ)
 予は明朝出發す。(ロ)

弟は明日大磯から歸ります。(ロ)

乙 存在時及び進行時

存在時及び進行時

存在時及び進行時を表す法

動作の結果の現に存在して居るのを存在時と云ひ、動作が既に進行して居るのを進行時と云ひます。例へば「山頂に記念碑立てり」。「橋が架けてある」。「立てり」架けてあるは立てた動作又は架けた動作の結果が現に存在して居ることを表して居るのですから、存在時でありまして、「鳥群りて鳴けり」。「鳶が青空を舞つて居る」の「鳴けり」「舞つて居る」は鳴く動作又は舞ふ動作が現に進行して居ることを表しますからして、進行時であるのであります。

存在時又は進行時を表すには文語では、四段の已然形及び佐變の否定形に「り」を附け、良變以外の動詞の連用形に「たり」を附け、口語では「ある」「ゐる」「をる」

（「を」を含む以下之に倣へ）以外の動詞の連用形に「ひある」「進行時には」「ひある」「ひをる」（「ばすて」おいでになる）を「含む以下これに倣へ）を附けるのであります。

處で茲で一寸お斷り致して置きますが、四段の既然形及び佐變の否定形に「り」を附けると申しましたのは、これは説明の便宜に依るのであります。實は四段及び佐變の動詞の連用形と「あり」とが熟合したものであるのです。それから良行以外の動詞に「たり」を附けると申しましたのは、「たり」は「て」と「あり」とが熟合したので、既に存在を示して居りますから、古來良變の「あり」「居り」などにはこれを續けた例がないからであります。近來の文には往々其の例を見るのであります。例へば既に法文などにも「滿二年以上勅任檢事の職に在る者又はありたる者」と云ふやうなのがあるのであります。

これ丈をお斷りして置いて、文語・口語の例をお示し致します。

文 語

机に三冊の洋書を置けり。

月影水に映れり（存在時）

口 語

机に三冊の洋書が置いてある。

月影が水に映つて居る（存在時）

「である」「てある」「をる」に關する注意

独立ノ片

あるー有情

あるー非情

助動詞準ナル片

あるー有情

あるー非情

「である」「てある」ハ他動詞ノ名詞活用ニ主接

ノ如ク用ヰタル片

床に應舉の軸をかけたり。

落花地に散り布きたり。(存在時)

兄は書齋にて書を讀めり。

妹は今離亭にて琴を彈きたり。

(進行時)

床に應舉の軸がかけてある。

落花が地に散り布いて居る。

(存在時)

兄は書齋で本を讀んでゐる。

妹は今離亭で琴を彈いてゐる。

(進行時)

「ある」「ゐる」と云ふ動詞は獨立に用ゐる時には、有情・非情で別れます。けれども、助動詞に準じて用ゐるときには、非情にも「ゐる」を用ゐるのであります。さうして「てある」を用ゐるのは、他動詞の客語が主語の如く用ゐられた場合に用ゐるのであります。例へば「洋書を置く」と云ふ文の「置く」を存在時にするとときには「置いてある」となつて自動性を帯びますからこれまでの客語が主語の位置に立つて「洋書が置いてある」と云ふ。さう云ふ場合に「てある」を用ゐるのであります。近畿地方及び其の附近では「雨が降つてゐる」「水が流れてゐる」の如く「てゐる」と云ふ場合に「てある」(「て」を含まず)を用ゐるやうであります。矯正しなければなりません。

「リ」に關する
注意

それから關東地方に於きましては「鳴いてゐる」「飛んでゐる」の「てゐる」を約めて「鳴いてる」「飛んでる」の如く「て」と云ひ、關西地方では「鳴いてをる」「飛うてをる」の「てをる」を約めて「鳴いとる」「飛うどる」又は「鳴いちよる」「飛うちよる」の如く「とる」又は「ちよる」と云ひます。又「鳴きをる」「飛びをる」の「をる」を轉じて「鳴きよる」「飛びよる」の如く「よる」と云ひます。總べて矯正しなければなりません。

文語で存在時又は進行時を表すには、前に申す如く動詞に「い」又は「たり」を附けるのでありますが、「り」は四段と佐變とに限つて附くのですから、之を他の動詞に續けて「教を受けり」「業を終へり」「實行し始めり」などと云ふのは誤謬であります。又奈變を「死ねり」「良變を居れり」「異なれり」(「異なり」は「異」にありの約)の如く云ふのもこれから云へば誤でありますが、此の中で「死ぬ」は口語で四段に用ゐて居る爲に文語でも四段に用ゐるものが多く、又「居る」は室町の末あたりから既に四段に轉じて居りますから、文法上許容すべき事項に四段に用ゐることを許容し、隨つて「死ねり」「居れり」と云つても差支のないことになつて居ります。又「異なり」も徳川時代の頃から「異なりたり」「異なれり」などと云ひ

リ
四段ト佐變

おなり
なり

た	ら
う	
た	り
う	
た	り
う	
た	ろ
う	
た	わ
う	
た	わ
う	

來つて今は殆んど唯一人疑ふ者もない位になつて居りますから、これも亦許容することになつて居るのであります。尚今日の普通文には動詞に「り」又は「たり」を附けて、存在時又は進行時を表すべき所を動詞の連用形に「あり」又は「居れり」を連ねて之を表すことも出来てゐりました。例へば「洋書を置けり」又は「軸をかけたり」と云ふ所を「洋書を置きあり」「軸をかけあり」と云ひ、「書を讀めり」「琴を引きたり」と云ふ所を「書を讀み居れり」「琴を弾き居れり」と云ふ類であります。「あり」を連ねる方はまだ十分にこなれて居りませぬが、後の一般に認められて居るやうですし、殊に「居れり」が許容されて居ますから、かう云つても差支はないと思ひます。

未然形―鳥のあと久しくとゞまれらば……。

連用形―よろづの言の葉とぞなれける。

終止形――金銀瑠璃を鏤めて作れり。

連體形——薪負へる山人の花の陰に休めるが如し。

「たり」の活用

既然形―秋の夜の長きを唧てれば……。

命令形―後をおぼさば今宵は唯伏したまへれ。

「たり」も亦次の如く良變に活用しますが、普通文には命令形を缺いて居ます。

未然形―心の中を見せたらば今までつらき人はあらじな。

連用形―山里に移らむと思ひたりき。

終止形―山々の花咲きたり。

連體形―おもしろく咲きたる櫻を長く折りて……。

既然形―雨降りたれば友は未だ來ず。

命令形―こなたになすませそ、疾く籠めおきたれ。

たら	(ら)	たり	(り)	り	る	たれ	(れ)	(たれ)	(れ)
未然形		連用形		終止形		連體形		既然形	
								命令形	

完了時

完了時を表す
法

丙 完了時

つゝぬい、
た、
「り」たり、ミ代用ス

動作の丁度終つたのを完了時と云ひます。「曙光は見えそめつ」時計が十時を打つたの「見えそめつ」打つたの如きはそれであります。

完了時を表しますには、文語では動詞及び第一種第二種の形容動詞の連用形に「つ」、「ぬ」、(ぬは奈變に)口語では同じ形に「た」を附けるのでありますが、「つ」「ぬ」は普通文には餘り多くは用ゐられませんが、前の「り」「たり」が其の代用をすることが多うございます。

「ぬ」が奈變に連ならないのは其の語原が「去ぬ」であるからだと云ふ事は前にも述べて置きました通ですから、奈變の動詞は其の儘でも完了を表すのであります。「鬼も食ひつらむ、狐めくものや取りもて去ぬらむ」。

文 語

口 語

とかく紛はしつゝ取隠したまひつ。

時計が十時を打つた。

おびえまどひて御簾の中に入

完了時以外の
「ぬ」

りぬ。

「ぬは時としては完了時以外の時をも表します。例へば

中納言「やゝまかりぬるもよし」とてうち笑ひたまへるぞめてたき。」

明け過ぎぬ。あな見苦し。かくて漕ぎ行くまゝに海のとりにと

どまる人も遠くなりぬ。萩の露玉にぬかんとどれば消ぬよし見む

人は枝ながら見よ。

の「まかりぬる」明け過ぎぬ「遠くなりぬ」消ぬは何れも完了しない時を完了したやうに強く言ひ表したので「行つてしまふ」明け過ぎてしまふ「遠くなつてしまふ」消えてしまふ」と云ふ意を成すのであります。

√かくの如く「ぬ」は完了の時を表すと共に又完了せぬ時を完了した如く表すこともありすが、尙多くの場合には完了の時を表すのであります。√そこで完了の時を表すに「つ」と「ぬ」と二つの助動詞があることになりましたが然らば此の二つの助動詞は無差別に遣つて宜しいかと云ふ疑問が起きます。それに就きましては古來種々の説がありますが「ぬ」は自動を受け「つ」は他動を受けると云ふ説が最も勢力を得て居ります。併しこれも一概には申せ

「つ」と「ぬ」の
區別

例外アリ

ぬー自動
つー他動

ぬ
完了時
ぬ
完了時以外

＝ Pleasure. 強き感、喜み
ぬ＝ inward 後ク弱ナリ

主観的ニシテ客観的ナリ
客観的ニシテ主観的ナリ

ませんで、實例にあたつて見ますと、其の例外も少くありませぬ。元來「つ」と云ふ音は鋭くて強くて、殊更にするやうな意味があり、ぬ」と云ふ音は緩くて弱くて、自然になるやうな意味がありますが、他動自動にも大凡之に似た區別がありますので、他動には自然に「つ」が多く附き、自動には自然に「ぬ」が多く附くのでありませう。併し他動自動は動詞固有の性質で自由に動かすことが出来ませんから、之に依つて別ちますと、自然多くの例外も出て参ります。それで必ずや其の言ひ方に依つて區別しなければなりません。即ち話す人が事實を主観的に直寫するが如き強い表彰法には「つ」を用ゐ、客観的に説明するが如き弱い表彰法には「ぬ」を用ゐるとかう云つたならば大抵は外れはあるまいと思ふのであります。例へば

かの方にはや漕き寄せよ時鳥道に鳴きつと人に語らむ。

山里に知る人もがな時鳥鳴きぬと聞かば告げに来るかに。

「鳴く」は自動でありますが、斯の如く「つ」も附けば「ぬ」も附く。併し前方は動作を主観的に表し、次のは客観的に表したのであらうと思ひます。✓

✓「つ」は「起きつ居つ物」を思ふ、「浮きつ沈みつ流る」の如く對偶の動詞の下に附

「つ」

対偶ノ動詞下ニテ対題ノ動作
交互ニ起ルヲ示ス

「つ」の活用

いて、動偶の動作が交互に起ることを表すことがあります。√若しこれが同じ動作でありますときには「見つ見つ」「聞きつ聞きつ」と云ふ代りに「見つつ行く」「聞きつつ書く」の如く「つ」を重ねます。此の時には同じ動作が斷續して起ることを表すのであります。√此のいづれの場合にも「つ」は上の語句を副詞的に變じてしまひます。總べて終止形でも之を二つ重ねると「行く／＼」考的に變じてしまひます。見る／＼變ず。の如く副詞的に變じるのですが「つも二つ重ねるが爲に上の語句を副詞的に變じるのであらうと思ひます。√序に申しますが、從來「つ」の下にある「を」を重ねるのを歐文の直譯から起つた語法として之を禁じて居ましたが、決して近頃から始つた語法ではなくして、かくのみや戀ひつゝあらむ御几帳たてつゝあるにこききぬを上に着て、ひきかへしつゝありし中にの如き古い用例が澤山あるのであります。

√「つ」は次の如く下二段に活用致します。

未然形―明けてばいかにくやしからまし。

連用形―夢てふものは頼みそめてき。

終止形―死にければ門の外に引きすてつ。

つ　て　て

✓「つ」は次の如く下二段に活用致します。

未然形！明けてばいかにくやしからまし。

連用形―夢てふものは頼みそめてき。

終止形―死にければ門の外に引きすてつ。

7 7 7

ず dute de.

そし
て
ぬ
た
の

「ぬ」の活用

連體形―これこそそのたまひつるはかなきためしなめれ。つ
既然形―おのれも酒飲みつれば早く往なんとて。..
命令形―君わたりなばかぢかくしてよ。て

古くは否定形の「て」に「ず」の連體形の「ぬ」の連なつた例があります。

かくながら散らで世をやは、つくしてぬ花の常磐もありと見るべく。
「ぬ」は「去ぬ」から出たと云はれる丈に、次のやうに奈變に活用致します。

未然形―たち別れなば戀しかるべし。

連用形―夜一夜とかく遊ぶやうにて明けにけり。

終止形―手に入れて内にもて來ぬ。

連體形―いかでなほ失せぬるわざもがなと歎く。

既然形―終にかくなり侍りぬればかへりては、つらくなむ。

命令形―更につかず、たちね。

古くは未然形に「ず」の連體形の「ぬ」すての約の「て」及び助詞の「なん」の連なつた例があります。

道知らでやみやはいなぬ逢坂の關のこなたは海と云ふなり。

ぬ ぬれ ぬる ぬ ぬ ぬ

みくま野に生ふる濱ゆふかさねなで一重に君を我ぞ思へる。
 人知れぬ我が通路の關守は宵々毎に打ちもねななん。
 連用形にて「たり」の連なつた例もあります。

行末短う心細くて、行ひがちになりにて侍れば……。
 身をたがへたるごとくなりたり。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
て	て	つ	つる	つれ	て
な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね

口語の「た」の活用は過去時の所でお話しすることにして、ここでは省いて置きます。

64

丁

過去時

き、けり、

「り、たり」

動作の既に終つた時を過去時と云ひます。例へば「書を讀みき」「昨日歸つた。」の「讀みき」「歸つた」の如き類であります。

過去時

① kitarari > keri
中 間 ノ 七 母 五 日 ト ア 世 音 ト 約 リ テ
ナリ。 < き あり

きー…… 過去ヲ 確メルニ用フ
けりー 過去ヲ 存在的に叙述ス
「き」と「けり」
との區別

「き」の活用

過去時を表すには文語では動詞・形容動詞の連用形に「き」(加變佐變に「けり」
口語では同じ形に「た」を附けるのであります。普通文には前に述べました
「けり」たり「殊に」けり「も」屢々過去時の助動詞として用ゐられまして「けり」は多くは
用ゐられませぬ。

文 語

三四の兒童例の如く老人の家に集りき。

野山に交りて竹をとりつゝ、よろづの事に使ひけり。

口 語

ゆふべ朝鮮へ出發した。

「き」と「けり」との區別に就きましても、古來種々の説がありますが「き」は専ら過去を確めるに用ゐる「けり」は過去を存在的に叙述するに用ゐると云ふのが當つて居るやうに思ひます。「けり」は「き」と「あり」との約だと云ふ説がありますが、如何にもそんな趣があるやうであります。随つて「き」は詞對話に多く用ゐる「けり」は草子地に多く用ゐるのであります。「き」は次の如く「き」「し」「しか」と活用いたします。

き、し
しか

「き」の終止形
し

きト用フベキト云
ヨリクナリ
しト云フ足利ノ本

「し」の未然形
せ

せは—
奥仮設相像

終止形—都を大和の橿原に定めたまひき。

連體形—是、我が帝國の起りし始なり。

既然形—わるものどもの勢強かりしかば、轉じて紀伊に入り給ひき。

✓今日の普通文には終止形の「き」を用ゐるべき場合に、連體形の「し」を用ゐる事が多うございます。「二時間の長きに亘りて鎮火せざりし」。金融の靜謐なりし割合には金利の引弛を見ざりし。之は既に中古から用例があつて、足利の末あたりから益々多くなつて參つたのです。而も歐文の直譯文には「き」と云ふべき處に總べて「し」を使ひました爲に、大いに國學者に嫌はれましたが、修辭上適所に之を用ゐることは少しも差支のないことと思ふのであります。

ます。「文法上許容すべき事項に之を許容して居ます。」
✓「き」の活用形は今舉げました如く終止形、連體形、既然形の三つしかありませんが、尙此の外に未然形の「せ」を加へる人もあります。此の形は常に「ば」と云ふ助詞を連ねて事實でないことの明瞭なものを、萬一かくもあらばと假定するに用ゐます。例へば

世の中に絶えて櫻のなかりせば、春の心はのどけからまし。

いつはりのなき世なりせば、いかばかり人の言の葉うれしからまじ。
 の如きはそれで、櫻の在るのは事實であるが、其の事實に反して、若し無かつ
 たらと假定し、伴のある世であることは事實であるが、其の事實に反して、若
 し伴のない世だつたらと假定するのであります。此の場合には下の用言
 に「まい」又は「ひ」を添へるのであります。
 ✓「き」が動詞の連用形に連なるのを通則とすることは前に申した通であります
 ますが、加變佐變では「き」「し」「しか」の活用が分れて、其の未然形にも附く異則
 があります。

$\begin{array}{c} \text{爲}^{\text{セ}} \\ \text{し} \text{---} \text{し} \\ \text{か} \end{array}$	$\begin{array}{c} \text{來}^{\text{コ}} \\ \text{し} \text{---} \text{し} \\ \text{か} \end{array}$
$\begin{array}{c} \text{爲}^{\text{シ}} \\ \text{し} \\ \text{か} \end{array}$	$\begin{array}{c} \text{來}^{\text{キ}} \\ \text{し} \text{---} \text{し} \\ \text{か} \end{array}$

の如く加變には未然形にも連用形にも、連體形の「し」と已然形の「しか」とが附
 きますが、終止形の「き」はどの形にも附かず、佐變には未然形に連體形の「し」と
 已然形の「しか」とが附き、連用形に終止形の「き」が附くのであります。

「し」を四段に附する許容

四段既に形ニし付ク
ハ佐々木氏曰ク
ヤナルニテ格を

p. 30.

し
し

「けり」の活用

かくの如く「き」「し」は加變と佐變との動詞に連なる上には取除の用法があります。随つて佐行四段の動詞に連なるときにも其の連用形に附いて「暮し」と「し」程になどの如く云ふのです。V處が普通文には其の既然形に附いて「暮せし」と「し」申せし程になどと云ひます。これは中古には絶えて例のないことでありますけれども、鎌倉の末頃からだん／＼物にあらはれて、室町を経て徳川になりましては、殆んど常格の如くになり、不衛の出るまでは有名な國學者でも尙且つ其の用法を知らなかつたのであります。今日では國學者・文法家などが頻りにこれを説きますけれども、此等の人々の著作以外のものは之を守つて居るものは殆んどなく、「し」の形は自然に廢滅に歸したやうな姿となつて居るのです。それで「文法上許容すべき事項」には之を許容して居るのです。國定讀本にも「幕府周章の餘之を許せしかば」の如く云つてあります。

✓「けり」は良變に活用致します。但し連用形の用例はまだ見當りません。否定形も中古には既に廢れて居ります。

否定形―瀧のみなわに咲きにけらずや。

終止形―なはの泊をさはむとて漕ぎ出でけり。

連體形―ゐなかわたらひしける人の子供井のもとに出て遊びけるを……。

既然形―歌よみどもに各歌詠みて奉れと仰せられければ、皆詠みて奉りけるを……。

餘情を添ふる
「けり」

✓「けり」は時としては過去の意がなく、唯餘情を添へるに用ゐられることがあります。之は多くは是まで氣が附かないで過して來たことを見聞して、又は思ひかけぬ出來事に接して打驚く場合に用ゐるのであります。

かいつらね人々出てにしは此の君が寄せたまふなりけり。年頃便なげに据ゑ奉りしを妬しと思ひしみたまへるなりけり。

これや惟茂が妻の手、いたうこそかきけれ。よき折にこそありけれ、行きてたばかれ。

「た」の活用

✓「た」は次の如く活用致します。

推量形―あの人はもううちに歸つたらう。

終止形——昨日三時に立つた。

假定形——向ふに着いたら手紙をよこせ。

既定形——裏の畠を掘つたら寶物がざく／＼出た。

文語の「たり」の連用形の「たり」は「行つたり戻つたり見たり聞たり」の如く、對偶の動詞の下に附いて、對偶の動作が交互に起ることを表す場合に限つて口語にも用ゐます。又既定形の「たれ」も「昨日行つたれば居なかつた。」折角書いたれば間違つて居た。」の如く「ば」を伴つて口語の既定にも用ゐることがあります。

口語には「行つたつけ」「見たつけ」などと云ふ「たつけ」と云ふ助動詞があります。過去を回想するに用ゐるのであります。

活用表

口	文	
	語	未然形
推量形	(けら) (せ)	
終止形	○ ○	連用形
連體形	け き	終止形
假定形	け し	連體形
既定形	け し れ か	已然形

語
たら(う)
た
た
た
ら
(た)れら

5 戊 存在的過去時及び進行的過去時

存在的過去時
進行的過去時

存在時と過去時との重なつたのを存在的過去時と云ひ、進行時と過去時との重なつたのを進行的過去時と云ひます。存在的過去時または進行的過去時を表すには、動詞に存在時または進行時の助動詞と過去時の助動詞とを重ねたものを附けて表すのであります。即ち文語の「たり」「けり」「なり」「けり」口語の「てあつた」「てゐた」「てを」「つた」(「ていらつしやつた」「ておいでなかつた」「てお」「いであそば」)は是であります。普通文には「たり」「き」の外は殆んど用ゐません。

文 語

うつらふと見ゆるものから菊
の花咲けりし枝ぞかはらざり
ける。(存在的過去時)
遠長く仕へむものと思へりし

口 語

部屋の前においてあつた石が
夜の中に見えなくなつた。(存在
的過去時)
わたしは久しく仙臺に住んで

君しまさねば心ともなし。進行的過去時

川のほとりに梅の咲けりける
をよめる。存在的過去時

むかし男……女をあひ知れり
けり。進行的過去時

御曹司の前に置きたりし石、夜
の中に見えずなれり。存在的過去時

予は久しく仙臺に住みたりき。
進行的過去時

ゐた。進行的過去時

66 已 完了的過去時

完了的過去時

完了時と過去時とが重なつたのを完了的過去時と云ひます。完了的過去時を表すには、文語では動詞の連用形に完了時の助動詞と過去時の助動

詞とを連ねたで「ひけり」に「ひけり」を附け、口語では動詞の連用形に「ひ」
 かつたを附けるのです。前條の「りき」たりき「殊に」たりき「も」屢、此の時を表す
 に用ゐられます。普通文には「たりき」の外は餘り用ゐられませぬ。

文 語

佗ひとびつゝも、昨日ばかり過して
 き。

あるじ許してけり。

京にて生れたりし子、國にて失

せにしかば……。

おのが世々になりにければ、疎

くなりけり。

「逃げてしまつた」飛んでしまつたを約めて「逃にげちやつた」飛とんぢやつた」など
 と云ふ所があります。原の形で云ひたいと思ひます。

口 語

繩を切つて逃にげてしまつた。

6-7 庚 未來時 む

未來時

未來時を表す
法

動作がこれから後に起る時を未來時と云ひます。例へば「雨止まむ」。「明日は行かう」。「止まむ」行かうの如きものであります。

未來時を表すには文語では動詞の否定形に「む」を附け、口語では四段の否定形に「う」其の他の動詞の否定形に「よう」を附けるのであります。

文 語

明日は雨降らむ。

口 語

明日は雨が降らう。

今夜は月見をしよう。

敬相命令ハ未來ヲ用也

敬相の例

むとす

古くは高貴の人に、向つての命令に未來時を用ゐることがありました。例へば「賜はれ」御覽ぜよなどと云ふべき場合に「それ一枝折りて賜はらむ」。「ふと御幸して御覽ぜられむ」と云ふ類であります。口語でも「先づ入らせられませう」などと云つたのが見えます。命令は未來時に屬する事柄ですから、婉曲に言ひ表すが爲に斯の如く轉用するのであります。✓未來時の助動詞の「む」の下に「とす」を連ねますときには、動作の將に起ら

mnt+to en> mgn>zn.

Nasal voice 8+7).

ヤカ⁸ハ⁸カ⁸
ヰ⁸ト⁸ハ⁸.

むとす
むずず

方言の未來時

んとする形勢を表します。「雨晴れむとす」「水溢れむとす」などはそれ
てあります。此の「むとす」は古くは「と」が省かつて「むず」となり、または「むも」とも
共に省かつて「ず」となることがあります。此の場合には單に未來を表す
のであります。

彼のもとの國より迎へに人々まうて來むず。

此の歌ぬし又まからずと云ひて立ちぬ。

未來の助動詞の「う」又は「よう」を東北地方では「書くべし」「書くべし」「受けべし」
「受けべし」の如く、「べし」又は「べい」などと云ふ所が多く、山梨・静岡・愛知等には「書
かあず」「書かず」「書かあ」「受けいず」「受けず」「受けい」と云ふ所があります。「べ
し」「べい」は文語の「べし」の轉じたのでありまして、「ず」は今申しました「むとす」が
約つたのであります。

✓ 上一段下一段佐變の動詞の未來例へば「起きよう」「受けよう」「しよう」などの
如きものを、西國では「起きよう」「起きう」「受けう」「受さう」「しう」などの如く云
ふ所があります。「起きう」「受けう」「せう」は文語の「起きむ」「受けむ」「せむ」の音便で
あります。又加變の未來を「きさう」「こう」「くう」などの如く云ふ所があります。

「む」の活用

「こう」は西國に多うございます。文語の「こむ」の音便であります。

「む」は次の如く「む」「め」と活用致します。「め」は普通文には用ゐませぬ。

終止形——近日故郷に歸らむ。

連體形——兄の子に家を譲らむ志あり。

既然形——命長くところ思ひ念ぜめ。

口語の「う」「よう」は活用致しませぬ。

終止形	連體形	既然形
む	む	め

6-8 辛 存在的未來時及び進行的未來時

存在的未來時
進行的未來時

存在時と未來時との重なつたのを存在的未來時と云ひ、進行時と未來時との重なつたのを進行的未來時と云ひます。存在的未來時又は進行的未來時を表すには、動詞に存在時の助動詞又は進行時の助動詞と未來時の助動詞との重なつたものを附けます。文語の「らむ」「ならむ」、口語の「てあらう」

てゐよう「てをらう」(「ていらつしやらう」「ておいてあそばさう」を含む)は是であります。今日の普通文には「たらむ」の外は殆んど用ゐませぬ。

文 語

しらぎぬに岩を包めらむやう
になむありける。(存在的未來時)
ゆかしきもの見せたまへらむ
に、御志は見ゆべし。(進行的未來
時)

三年後には紳士になりたらむ。
(存在的未來時)

明後日の今頃は吉野の花を眺
めたらむ。(進行的未來時)

口 語

あすはこゝに旗が立て並べて
あらう。(存在的未來時)
三年の後には紳士になつてゐ
よう。(存在的未來時)
あさつての今頃は吉野の花を
眺めてゐよう。(進行的未來時)

6-9
壬 完了的未來時

完了的未來時

完了時と未來時との連なつたのを完了的未來時と云ひます。完了的未來時を表すには、文語では動詞に完了時の助動詞と未來時の助動詞とが連なつた「てむ」なむ、口語では動詞に「てしまはう」を附けるのであります。「らむ」「たらむ」殊に「たらむ」屢、完了的未來時の助動詞として用ゐられます。「たらむ」の外は今日の普通文には用ゐられることは稀であります。

文語

口語

龍あらばふと射殺して首の玉取りてむ。

こんな物は捨ててしまはう。

心は花になさばなりなむ。

以上申した所を概括しますと、

現在時

現在時

進行時

完了時

文語——りたり

口語——てあるてゐるてをる

文語——つぬ(りたり)

口語——た

過去時

文語——き・けり(り・たり)
口語——た

過去時的

文語——り・き・りけり・たり・き・たりけり

時

過去進行時的

口語——てゐた・てをつた

完了的過去時

文語——てきてけりにきにけり(たりき)
口語——てしまつた

未來時

文語——む
口語——う・よう

存在時的

文語——らむ・たらむ

未來進行時的

口語——てゐよう・てをらう

完了的

文語——てむ・なむ(たらむ)

未來時

口語——てしまはう

右の中の複雑な文語の時の成立を示しますれば次の通になります。

存在的

(り)——り

進行的

(たり)——たり

(き)——き
過去

完了的

(つ) (つて) き
(ぬ) (ぬに) けり
過去

存在的

(り) (り) ら
(たり) (たり) たら
む 未來

進行的

(たり) (たり) たら

完了的

(つ) (つて) て
(ぬ) (ぬ) な
む 未來

第七節 推量の助動詞

接續

動作を推量するに用ゐる助動詞を推量の助動詞と云ひます。動作を推

量するには文語では動詞・形容動詞の否定形に「む」「まじ」「連用形に「けむ」「良變の

連體形又は他の動詞の終止形に「べし」「めり」「らしい」「む」「まじ」を附け口語では四

段の否定形・形容動詞の推量形に「う」「四段以外の動詞の否定形(佐變の「せ」)に「よ

う」「總べての動詞の連用形に「さうだ」「動詞・形容詞の終止形連體形に「だらう」「て

せう」「らしい」「やうだ」「四段の終止形又は他の動詞の否定形(佐變の「せ」)に「まい」を

附けるのであります。併し同じ推量と申しましても、其の表す事情は各動

動、否定形、む、まし、

連用形、けむ

良變、連體形、べし、

他、動詞、終止形、あり、まし、

む

動作有様ヲ推量ス、

動作有様ヲ假想ス、

りむ

たりむ

ねむ

む・う・よう

存疑的推量

たむ

てむ

ちむ

「む」「う」「よ
う」の活用

だらう・でせ
う

詞に依つて多少の差異がありますから、これから其の一々に就いて説明する
ことにいたします。

「むうよう」「む」は文語の助動詞、「う」「よう」は口語の助動詞で、何れも一般に動
作有様を推量するに用ゐます。「明日は雨降らむ」「此の川は浅からう」「さぞ待
つてゐよう。」

「む」又は「う」「よう」は動作有様を假想するに用ゐることがあります。「思はむ
子を法師になしたらむ」「こそいとほしけれ」「風吹かむ」には舟出でじ。「そんな所
へ行かうものなら大變だ。」

「む」又は「う」「よう」の活用は未來時の所で述べた通であります。また「り」「たり」
に附いて、存在的又は進行的推量を表し、「つ」「ぬ」に附いて完了的推量を表すこ
とも未來時の所で述べたものに準じます。

「だらうでせう」「だらう」「でせう」は口語の助動詞で、略「う」「よう」と同様の場合
に用ゐます。「でせう」は丁寧な表彰法であります。「此の川は浅いだらう」「さ
ぞ待つて居るでせう」。此の助動詞は指定の助動詞の推量形に「う」の附いた
ものと同形でありますが、彼は用言に多く「の」を介んで付き、此は之を介さず

m-lippen (Kant)
 かいN. (gagen Kanchi) 1
 カレガ、いカソノ初
 けケテエトナレ、

kit+mu>

Kema
 Ken

過去時、動作及有様ヲ推量ス
 けむ²

「けむ」の活用

まし³

に附くので區別することが出來ます。

けむ 「けむ」は文語の助動詞で、過去時の動作、有様を推量するに用ゐます。

「む」が「り」たり又は「つ」「ぬ」に附いて「らむ」「たらむ」又は「てむ」「なむ」を作るが如く、「き」に附いて「けむ」を作つたのだと云ふ説がありますが、或はさうかも知れませぬ。「い」かなる心にかありけむ。「面白き事と思ひけむ」。

「けむ」は未來時の「む」と同じく活用致します。又「り」たりに附いて存在的又は進行的、過去時の推量を表し、「つ」「ぬ」に附いて完了的過去時の推量を表すことも未來の所て述べたものに準じます。

まし 「まし」は古い文語の助動詞で、未來を推定し、又は主として現實でない動作、有様を假想するに用ゐます。例へば、

春來れば雁かへるなり、白雲の道ゆきぶりに、ことやつてまし。

あな戀し、行きてや見まし、津の國の今もありとふ浦の初島。

の如きは未來を推定した例、

風をだに待ちてぞ、花の散りなまし、心づからに、うつろふぞ、うき。

見る人もなき山ざとの、さくら花外の散りなむ、後ぞ、さかまし。

世にあるものならば、此の國にも持てまうてきなまし。

頼朝と云ふ人もなく、泰時と云ふ人もなからまし。かば此の日本國の人民いかになりなまし。

世の中に絶えて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし。

の如きは何れも現實でない動作有様を假想したのであります。即ち第一のは花は必ずしも風を待つては散らぬのに、散ることを假想し、山里の花も外の花と一所に咲くのに、後に咲くことを假想し、他も亦同様のことを假想したのであります。古來この「まし」に希望の意があるやうに申し來つて居ますが、それは總べて未來にかゝるものの偶然の結果で、必然の結果ではないのであります。

「まし」は次のやうに「まし」「ましか」と活用致します。併し連體形は其の用例に、自ら定まりがありまして、總べてに應用は出來ません。

終止形——昔は又もかへり來なまし。

連體形——常よりも歎きやすらむ、棚機のははまし暮をよそに眺めて。

既然形——げにかうおはせざらましかばいかに心細からまし。

「まし」の活用

ませば
まさかば
未然、假想條件
→ 既成、假想條件

「ませ」「まし
か」の呼應

「まし」は右の活用の外に

うちわびて落穂拾ふと知らませば、我も田づらに行かましものを。

の如く「ませ」と云ふ活用形もあります。これは「きに」せがある如く「まし」にも「ませ」があるので、未然形と云ふべきものでありませう。併し「ませば」「ましかば」も共に假想の條件を表すのに、何故にかく二様の言葉遣があるか、何故に假想が更に未然と既然との二つに別れるか、之は古來の難問題で、而もまだ解決の出来ない所であるのであります。

兎に角「ませ」「まし」かの形は「ば」が附いて假想の條件を表すのですが、其の場合には其の下も必ず假想の動作有様を以て之に應ずるのであります。其の事は既に前に出した例にも見えますが、更に一二を舉げて證據立てて置くことに致します。

松立てる門ならませば問ひてまし。

かねてより君來まさんと知らませば門に宿にも玉しかましを。

まして龍を捕へたらましかば、又こともなく我は害せられなまし。

煩はしげに思ひ纏はす氣色見えましかば、かくもあくがらさざらまし。

べし

し。

「ましは」り「たり」に附いて存在時又は進行時の假想を表し、「つ」「ぬ」に附いて完了時の假想を表しますが、其の事は總べて前に述べた所に準じて御推量を願ひます。

べし 「べし」は文語の助動詞で、必然を期して、動作有様を推量するに用ゐます。「雨降るべし」「雪も解けぬべし」「かく便利にして價安きものは世に少かるべし」「餘は言はずとも明かなるべし」「又少しく轉じて可能適當の意を表し、又は義務命令の意を表すに用ゐることもあります。例へば、

實に忠臣の鑑と云ふべし。腰間の秋水、鐵をも斷つべし。死すべし。時は今なり。竹の大なるものは桶にも作るべし。

は可能又は適當に用ゐたもの、

天壤無窮の皇運を扶翼すべし。疾く行くべし。軍人は禮儀を正しくすべし。笑はんと欲せば一家の和合を計るべし。

は義務命令に用ゐたものであります。

右の外「べし」は古くは現在の様子を軽く推量するに用ゐました。例へば

「べし」の活用

「べし」の活用
形と形容詞活
用形との用法
の類似

男などは心やりにやあらむ、唐歌など歌ふべし。」「……あな苦しとて火挑げなどすべし。」　まだ講師も上らぬに懸盤どもして何にかあらむ物まゐるべし。

✓「べし」は次の例のやうに形容詞の如く活用致します。

未然形——今尙見るべくば行きて見む。

副詞形——陷りぬべく見えたり。

終止形——雨降るべし。

連體形——死すべき秋は今なり。

既然形——車にて行くべければ用意せさせよ。

✓斯の如く「べし」は形容詞の如く活用するのみならず、其の活用形の用法も形容詞に似通つた所が多うございます。先づ語幹の「べ」は、形容詞の語幹に接尾語の「み」が附いて「夢をはかなみ」「底清み」などとなつて、上の語句に副詞の如き力を與へるが如く、接尾語の「み」が附いて「べみ」となつて、上の語句に副詞の如き力を與へます。

さほ山の榊の紅葉散りぬべみよるさへ見よと照らす月影。

Root + mi
Be + mi

べし 形 活用 類似

玉くしげ明けば君が名立ちぬべみ夜深く來しを君見けむかも。

えそれから形容詞の語幹に「ら」に「が付き」と熟合して「清らなり」「薄らなり」となるが如く「ら」に「が付き」と熟合して「べらなり」となります。

鳴きとむる花しなければ驚もはては物憂くなりぬべらなり。

夏蟲を何かいひけん心から我も思ひに燃えぬべらなり。

古くから之を「べきなり」の約つたのだと云ひ來つて居りますが「べきなり」が

「べらなり」となる譯はないと思ひます。「べみ」「べらなり」はいづれも今日の普通文には用ゐられませぬ。

3

次に副詞形の「べく」も形容詞と同じく下の用言を限定します。近頃の學者の中には「べく」を歐文の直譯から來たもののやうに思つて居る人もあるやうですが「君とまるべく」句はなむ。「對面すべく」たばかれ。「如く古くから使つて居ます。」又形容詞と同じく中止形として用ゐられもしますし音便で「べう」ともなります。尤も「べう」は普通文には用ゐられませぬ。

或時は山の峯にも登りぬべく、或時は海の底にも沈みぬべし。

車より落ちぬべうまどひ給へば……。

楊貴妃タシの例も引き出でつゝ

うなりゆくに……。

4又「登るべからず」の如く「あり」と熟合する所も形容詞が一種の形容動詞を作るのと同じく「べからむ」が「べけむ」となるのも「善からむ」「高からむ」などが「善けむ」「高けむ」などとなるのと同じであります。

5次に連體形の「べき」も形容詞の連體形が音便で「い」となるが如く、音便で「べい」となります。今日の關東方言に「行くべい」「行くべい」などと申しますのは全く此の脈であります。尤も之も今日の普通文には用ゐられませぬ。

いとほしうもあるべいかな。如何なべい事ぞとも……。思へばうらめしかべいことぞかし。

「べし」「り」「たり」「つ」「ぬ」に附いてそれぞれの事情を表しますが、それは前に述べた所に準じて御推量を願ひます。

1めり「めり」は古い文語の助動詞で、現在の動作有様を軽く推量する「べし」の一つの用法に似て、而も一層軽く推量し、動作有様を確説するのを稱、憚るが如き様に云ふのであります。古來之を「見えあり」の約つたのだと云ひ來つて居ますが、一向當らぬ様に思ひます。近頃「べし」の「べ」が良變に活用した

1) mie + tari } meri
2) Beshi, ばし

めり

のだと云ふ人がありますが、どちらかと云へば此の方が眞に近い様であります。

此の音たがはぬ先に必らず相見むとのたまふめり。燕は子生まむとする時は尾をさへげて、七たび廻りてなむ産みおとすめる。世の中の人々の心はめかるれば忘れぬべきものにこそあめれ。

此等はみな「のたまふ産みおとす」あれと確説してよさうな所を「めり」を附けて、おぼめかして云つたのです。尙分り易い例を出して見れば、枕草紙の初詣の所の道の案内をする法師の詞に「そこもとはおちたる所は侍るめり」とある。目の前に見て云ふのですから「侍るなり」と確説して差支ない所であります。又後拾遺集に「大原祭の上卿にて参りて侍りけるに雪の所々消えたりけるを見て詠み侍りける。」と云ふ詞書をおいて、

神葉に降る白雪も消えぬめり神の心も今や解くらむ。

とある。之も現在消えたのを見て云ふのですから「消えぬなり」とか「消えにけり」とか確説して差支ない所であります。それを「めり」を附けてかうばかり云ふのであります。

「めり」の活用

「めり」は良變の如く活用致します。但し未然形を缺いて居ます。

連用形——尼君其の程までながらへ給はなんとのたまふめりき。

終止形——この頃は左様の振舞更に包みたまふめり。

連體形——こがらしに吹きあはすめる笛の音を……。

既然形——鶯だに見過し難げにうち鳴きて渡るめれば……。

さうだ・さう
です

さうださうです 「さうだ」は口語の助動詞で、動作有様の形勢を表すに用

ゐます。「雨が降りさうだ」です「東が負けさうだ」です「それでも善かりさ

うだ」です「此の「さうだ」は動詞・形容動詞の連用形に附くのですが、

動詞・形容詞の終止形連體形に附くものは風評を表すに用ゐます。「西國に

は悪い病氣がはやるさうだ」です「交通の便利が悪いさうだ」です

「さうだ・さう
す」の活用

「さうだ」です「は第二種の形容動詞の如く活用致します。

やうだやうです 「やうだ」です「は口語の助動詞で、現在の動作有様を推

量するに用ゐます。「向ふから人が来るやうだ」です「すこしむづかしいや

うだ」です

「やうだ・やう
です」の活用

「やうだ」です「も第二種の形容動詞の如く活用致します。

らし・らしい

らしらしい 「らし」は文語の助動詞「らしい」は口語の助動詞で、現在の動作・有様を推量する所は「やうだ(＝です)」に似て居りますが、彼は見聞する事柄に就いて動作・有様を推量するに用ゐ、此は見聞する事柄から聯想して動作・有様を推量するに用ゐるのであります。

文語

此の川にもみぢ葉流る、おく山の雪解の水ぞ今まさるらし。

さよ中と夜は更けぬらし雁の聞ゆる空に月わたる見ゆ。

『どうもあの人ではないらしい』の如きは見聞する事柄を省いて、それから聯想した結果のみを挙げたのであります。

文語の「らし」は語形を變化致しませぬ。併し普通文では志久活の如く活用して使はれて居ますが、未然形・已然形は使はぬやうであります。又口語でも普通の形容詞の如く活用して居りますが、假定形がありません。

文語

□ 語

□ 語

下駄の音が聞える、子供が歸つたらしい。

どうもあの人ではないらしい。

「らし・らしい」の活用

副詞形―雨降るらしく思はる。

終止形―風吹くらし。

連體形―人あるらしき様なり。

副詞形―見たらしく話す。

終止形―子供が歸つたらしい。

連體形―人の來るらしい様子も

ない。

文語の「らしは」「たり」「つ」「ぬ」「けり」に附いて夫々の事情を表します。

らむ 「らむ」は文語の古い助動詞で、博く現在の動作・有様を、推量するに用

ひます。即ち「らし」の如く根據ある推量を表すのとは違つて、最も確な推量

を表すのであります。

又こと所に赫夜姫と云ふ人ぞおはすらむ。車なりける人、此のほと

るのともす火にや(同車)の人の見ゆらむと思ひて消ちなんとす。ま

だ世にあらば如何なる世にかさすらふらむ。

口語では此に當る言葉はありませんが、地方に依ると、お出でるらう「見え

るらう」と申します。それがやがて此の音便であります。

「らむ」は時としては或事柄に就いての解説を想像することがあります。

例へば

と柄、解後の相像

らむ

昨日さばかりありけむものを、夜の程に消えぬらむことと思ひ屈す
れば……。

いかばかりなる人なれば、九重をかく立ちならすらむ。

こゝろざし、深くそめてしをりければ、消えあへぬ雪の花と見ゆらむ。
わが戀し君があたりをはなれねば、降る白雪も空に消ゆらむ。

此等の例で雪の消えたこと、禁中を馴々しく立振舞ふこと、まだ消え果てぬ
雪の花と見えること、降る白雪の空に消えることは何れも眼前に見る事實
ですから「らむ」が其の事實を推量する筈がない。雪の消えた時、馴々しく立
振舞ふ人の身分、又は雪の花と見える原因、白雪の空に消える原因が分りま
せぬので、其の解説を想像するのであります。即ち初めのは「消えぬるは夜
の程にてあるらむ」。「九重をかく立馴すはいかばかりなる人なればなるら
む」。「さえあへぬ雪の花と見ゆるは、志深くそめてしをりければなるらむ」。
「降る白雪の空に消ゆるはわが戀の君があたりをはなれねばなるらむ」と云
ふ意味なのであります。若し此の後の二つの例の如く或事柄の解説を想
像する場合に、若し其の原因の見當がつかぬ時には、などと云ふやうな疑ひ

の語を置きます。

かく數ならぬ身をなど。かくしも思ふらむ。

宿りせし花橘もかれなくになど。ほとゝぎす聲絶えぬらむ。

女が深く男を思つて居るも事實、時鳥の聲の絶えたのも事實ですが、其の原
因が分らぬのでそれを疑ふのであります。即ち初めのは「かくしも思ふは
何故なるらむ。」「時鳥聲絶えぬるは何故なるらむ。」と疑ふのであります。
歌などでは往々此の「など」と云ふやうな疑の語を省きます。

久方の光のどけき春の日に。など。靜心なく花の散るらむ。

春のいろのいたりいたらぬ里はあらじ。など。咲ける咲かざる里の見
ゆらむ。

むかしべや今も戀しき時鳥。など。故郷にしも鳴きて來つらむ。

此の最後の歌の如きは先づ上に原因の推測を擧げては居りますが、「らむ」の
用法は初の二つとかはりませぬ。即ち「時鳥故郷にしも鳴きて來つるは何
故なるらむ。むかしべの今も戀しきためなりや。」と云ふ意味であるので
あります。

「らむ」の活用

「らむ」は「む」と同じく「らむ」「らむ」「らめ」と活用致します。

終止形——如何なる尼に物たまふらむ。

連體形——彼の寄り來らむ人にかう聞かすな。

既然形——心得ず思召しつらめども、心強く承らず居りにしこと。

「らむ」「り」「たり」「つ」「ぬ」などに附いてそれぞれの事情を表します。或地方で「行つ」「つらう」「來つ」「らう」などと云ひますのは「つらむ」の音便であります。

まじ・まい

まじ・まい

「まじ」は文語の助動詞、「まい」は口語の助動詞で、推量して打消すに用ゐます。「べし」の反對だと云ふ説がありますが、そんな趣がありません。

「名は朽つまじ」「あれは行くまい」。

「まじ」の動詞に連なる形

文語の「まじ」が動詞に連なるときは、前申した如く良變以外は終止形に附くのですが、それを言は「まじ」起き「まじ」受け「まじ」見「まじ」せ「まじ」の如く未然形に附けるのは誤であります。

「まい」の加變佐變に連なる形

口語の「まい」が加變・佐變に連なるときは、加變では否定形の「こ」、佐變では否定形の中の「し」の形に附いて、今日はこまい。納得しまい。の如く申すのですが、それを「きまい」「くまい」「くるまい」と云ひ、又は「せまい」「すまい」「するまい」などと云

「まじ」「まい」
の活用

ふのは方言であります。

文語の「まじ」は形容詞の如く活用し、口語の「まい」は活用しませぬ。

未然形——人に語るまじくば見せむ。

副詞形——え堪ふまじく泣いたまふ。

終止形——馬にも乗るまじ。

連體形——噫オホヒにも出すまじき事ぞ。

既然形——行くまじければ誘はずともあるべし。

副詞形の「まじく」が音便で「まじう」となり、「あり」と熟合して「まじかり」となることは形容詞と同じであります。

推量の助動詞の活用を表に纏めますと、次のやうになります。

文		未然形	(連用形) (副詞形)	終止形	連體形	既然形
べ	(ま)			む	む	め
く	(せ)					
べ				む	む	め
く						
べ	ま			む	む	め
し	け					
べ	ま			む	む	め
し	け					
べ	ま			む	む	め
け	し					
れ	か					

第八節 希望の助動詞

物事を希望するに用ゐる助動詞を希望の助動詞と云ひます。動作の希

口 語		語	
やうだら (う) やうで (う)	やうだら (う) やうで (う)	さうだら (う) さうで (う)	推量形
やうだら (う) やうで (う)	やうだら (う) やうで (う)	さうだら (う) さうで (う)	連用形
やうで	やうで	さうで	中止形
やうに	やうに	さうに	副詞形
やうで	やうで	さうで	終止形
やうな	やうな	さうな	連體形
やうなら	やうなら	さうなら	假定形

「たし」「たい」
の活用

望を表すには動詞の連用形に、文語では「たい」、口語では「たい」を附けるのであります。「我も行きたし。」「氷水が飲みたい。」

「たし」「たい」は形容詞の如く活用致します。副詞形の「た」が音便で「たう」になり、「あり」と熟合して「たかり」となることも、「歸りたげに」「行きたさうに」の如く語幹に「げ」又は「さう」に附いて副詞となることも形容詞と同じであります。

文			語			口			語		
未然形	副詞形	終止形	連體形	已然形	副詞形	終止形	連體形	假定形			
た	た	たし	たき	たけれ	た	たい	たい	たけれ			

第九節 比況助動詞

比況助動詞

物事を之に類似した物事と比べるに用ゐるのを比況助動詞と云ひます。

「如し」「やうだ(=です)」の活用

物事の比況を表すには文語では體言に「の」を介して、體言に準じるものに何も介せずして、又は夫に「が」を介して「如し」を附け、口語では體言に「の」を介して、又は體言に準じるものに何も介せずして「やうだ(=です)」を附けるのであります。「彈丸雨の如し」歳月は流るゝ如し「我の孔明あるは魚の水にあるが如し」鬚が針金のやうだ(=です)「田が青壘を布いたやうだ(=です)」

「如し」は形容詞のやうに活用しますが、既然形がありません。「如けれども」などと云ふのは誤です。「やうだ(=です)」は全く形容動詞のやうに活用します。

口 語		文 語	
やうたら(う)	推量形	ごと	未然形
	連用形	く	副詞形
やうでせ(う)	中止形	と	終止形
	副詞形	く	連體形
やうだつ(た)	終止形	とし	
	連體形	ごと	
やうで	假定形		
やうに			
やうだ			
やうです			
やうな			
やうなれ(は)			